

北海道立総合博物館協議会への諮問事項について（経過）

諮問事項 新たな時代に対応する北海道立総合博物館のあり方について（諮問及び答申）

1 経緯（概要）

北海道博物館を、「道民のための博物館」「北海道の自然・歴史・文化の魅力を深め発信する博物館」として、更なる活用を図るため、新たな諸課題を踏まえ今後のあり方について、令和6年3月に開催した令和5年度第2回北海道立総合博物館協議会へ諮問。以降、同協議会及びアイヌ民族文化研究センター専門部会によるご議論を経て、令和7年3月に開催予定の第3回協議会において答申をいただく予定。

2 諮問理由

- 近年、博物館法の改正を始め、文化芸術基本法や文化観光推進法の制定のほか、新型コロナウイルス感染症への対応やデジタル化の進展など、博物館を取り巻く環境の変化
- 博物館においては、基本的機能の充実とともに、その役割の多様化、高度化が求められている
- 中期及び長期的な視点により、本道の文化振興を担う中核的施設を目指すための諸課題への対応の必要性

*令和7年度は、「北海道博物館としての開館10周年」及び「北海道博物館の第3期中期目標・計画の始期」となる年度

3 諮問事項

○開催回数の制限があることから、諮問事項のポイントを4つに整理

ポイント	設定理由
基本的機能の充実	・「資料の収集・保存」「展示等の資料の利活用」「資料の収集、保存、利活用を支える調査研究」「成果の社会還元」など、新たな時代社会の情勢を見据えた取組が必要と考えられるため
求められる役割	・博物館に係る国内外における議論、社会ニーズや意識の変化、政策動向など、文化(財)のあり方などを踏まえ、道立総合博物館としての取組が必要と考えられるため
地域との信頼関係の構築	・博物館を創造活動の発展の場として活性化するためには、広くは、すべての道民を、より直接的に身近なところでは、近隣の道民や学校教育等との関係を意識した取組が必要と考えられるため
運営基盤強化	・上記の選定事項を踏まえ、組織体制、人材育成及び政策予算への反映などを含め博物館活動の持続的、発展的運営を目指すことが必要と考えられるため

※協議会におけるご意見聴取の経過

令和5年度第2回（R6年3月）、令和6年度第1回（10月）及び第2回（書面開催、期間：11月20日～12月10日）の計3回

4 今後の予定

<答申策定に向けて>

- R6. 12月 答申素案作成及び各委員へのご提示
- R7. 1月～2月 答申（案）策定及び各委員へのご提示
- R7. 3月 答申（令和6年度第3回博物館協議会を想定）

「新たな時代に対応する北海道博物館のあり方」に関する協議会の主なご意見

※本資料は、令和5年度第2回協議会（令和6年3月開催）と、令和6年第1回協議会（令和6年10月開催）でご協議をいただいた際に、委員の皆様からいただいたご意見を抜粋したものです。本専門部会における議論の参考としていただければと考え、資料として配付させていただきます。括弧内は発言された委員のお名前です。

■「答申」の内容に関わる意見・質問

「4つのポイント」に関わるご意見として受け止めているもの	
①基本的機能の充実 【成果の社会還元】	「北海道博物館版キッズニア」のようなことはできないか。子どもの職業体験という「社会還元」につながると思う。[特に子どもを対象とした、展示以外の方法での博物館利用の取組の可能性についてのご指摘と受け止めている]（小川副会長）
②求められる役割	1. 北海道の自然、産業、歴史についての資料を未来のために残していくこと、それを人々に伝えていくことが必要。 まず道民に郷土としての北海道に興味を持ってよく知ってもらうことが重要。そのための教育機関的役割を担うべき。特に利用者の高齢化が進行しているなかで、若年層に対する認知度向上と啓発が重要。 2. 加えて、道外（国内外）からの来訪者に対して、観光地としての北海道（或いは札幌市）の魅力ある重要観光施設としての役割を担う。（住吉委員）
	「多様な来館者が等しく楽しめる博物館とは何か」を追求していくことも大事なミッションだと思う。（岡田委員）
	アイヌ民族としての立場からは、（モノだけではなく）アイヌの伝統的な世界観・精神文化について紹介するという役割を求めたい。（小川副会長）
	道民から「北海道博物館・開拓の村・森林公園が三位一体となったフィールドミュージアム」として認識されるような博物館施設を目指す、という視点が加味されると、より有意義な施設になると思う。（佐々木会長）
③地域との信頼関係の構築 【「地域」（対象）の設定】	同じ来館者であっても、札幌近郊からの来館者を増やすのか、北海道全体からの来館者を増やすのかといった、対象を設定したうえで、その変化や効果を見えるようにすると評価としてわかりやすいと思う。（小林委員）
	近隣エリアを照準とした事業・活動と、「北海道」「道民」といった広く離れた範囲を対象にした、主にリモートによる事業・活動とは、分けて考えた方がよい。そして北海道は、その広さからバーチャル的な活動が有効なので、デジタル化した資料も活用してほしい。 さらに、利用者との距離感としては、①対面でできること、②（対面ではなくても）同じ時間でできること、③時間にとらわれず利用していただけることを分けたうえで、第3期ではどこに重きを置くかを検討してほしい。（小林委員）
	「コミュニティ」と一口に言っても、様々な種類・レベルがある。北海道博物館の場合は対象が道民になるが、道民にも様々な階層や地域、様

	<p>々なレベルのコミュニティがあるので、特に「道民参加型博物館」と言ったときに、誰を対象にするのかについて、漠然とでもいいのである程度のビジョンと戦略をもつ必要があるだろう。(佐々木会長)</p>
<p>③地域との信頼関係の構築 【デジタル技術を活用した博物館利用の整備】</p>	<p>長期入院を余儀なくされている子どもや高齢者など、外出できない方に対して、デジタル技術を活用として、展示物や資料の内部や詳細などを見せる取り組みは考えられる。(小川副会長)</p> <p>長期入院などによって博物館に来られない子どもたちも含めて、博物館というのは、知識を楽しむ場・興味の入り口であり、子どもたちの「知りたい気持ち」を満たせる場である。その意味では、社会的課題でもある、情報格差・知識（学歴）格差の解消に寄与できる場のひとつが博物館であると思う。(矢野委員)</p> <p>北大総合博物館を主体として、道内外の博物館と連携して作成したウェブコンテンツ「みんなの博物館」（収蔵庫に眠っている標本をデジタル化して、オンラインで閲覧できるサイト）がある。(小林委員)</p>
<p>③地域との信頼関係の構築 【イベントと展示の有機的な取り組み】</p>	<p>「地域との信頼関係」としては、函館市電が車内アナウンスを市民に参加して作ってもらったように、ワークショップの参加者に作ってもらったものを、そのまま博物館事業や展示に活かしていくという方法もある。(矢野委員)</p>
<p>③地域との信頼関係の構築 【民間を含む、他分野と連携した取り組み】</p>	<p>博物館の知見や資料を活かした他分野との連携・関係構築も考えていけるだろう。(たとえば、医療分野などと関係して、身体の仕組みの理解に、標本資料を活用するなど)(矢野委員)</p> <p>【民間を含む、他分野と連携した取り組みについて】 植物の化石でブローチなどを作って販売している事例を聞き、博物館が民間企業と一緒にできる取り組みをする可能性があるように思えた。(小川副会長)</p>
<p>③地域との信頼関係の構築 【博物館や学芸員の仕事を伝える取り組みについて】</p>	<p>学芸員から「収蔵庫を見てほしい」という話があった。こうした、内部の働き・仕事を見せるというコンセプトの収蔵庫見学ツアーはあってもよいと思った。(小川副会長)</p>
<p>④運営基盤の強化 【館内のガバナンス】</p>	<p>これまでの協議会では館内のガバナンスがいつも低い評価だったので、北海道博物館におけるガバナンスをもう一度検討する必要がある。(佐々木会長)</p> <p>ボトルネックやスタックポイントなどのいきづまった状況の原因を議論して、組織として認識し、どのように取り除くのかを明確にすることで、少しずつ前に進める仕組みになり、仕事も進めやすくなる。また、中期計画や年次計画などでは、具体的に、何をもって達成したと評価するのか、を共有していくが基本的なことで大切であり、職員のモチベーションにもつながる。(住吉委員)</p>
<p>④運営基盤の強化 【職員のモチベーション向上】</p>	<p>学芸職員のモチベーションの向上につながるようなことが必要だと思う。(小川副会長)</p> <p>学芸員の得意分野を掘り下げてほしい。そのために、事務仕事などで簡易的にできるところは効率化すれば、研究意欲も上がると思う。また、職員同士でコミュニケーションを活発に交わすことが大切だと思う。(小川副会長)</p> <p>【学芸業務の充実と、事務仕事の効率化について】 収蔵資料のデジタル化だけでなく、事務仕事にもDXは活用できるので、うまく活用することで効率的に業務を進め、そのぶん学芸業務の充実にもつなげられると思う。(矢野委員)</p>

<p>④運営基盤の強化 【人材育成のための研修】</p>	<p>人材育成には組織力の強化が大事で、外部での研修に参加するだけでは限界があることや、専門のスキルが高い人材でも育成となると戸惑うことなどがあり、人を育てられる組織体系づくりが重要だと感じている。職員の研修としては、専門分野の研修だけではなく、部下の育成方法や組織のあり方などを他業種から学んでいくことも重要だと思う。(村木委員)</p> <p>他館や他分野との交流のなかで、スキルアップすることも大切。職員の資質向上の一環として、地方の小規模な博物館の職員と交換留職をすることで、地域での体験や発見などから学べることは多くあると思う。(矢野委員)</p>
<p>④運営基盤の強化 【職員の資質向上につながる目標設定】</p>	<p>アメリカの国立公園におけるガイド（インタープリター）には、インタープリターとして必要な資質のガイドラインがあり、それは職員にとっての目標にもなっている。</p> <p>同じように、たとえば「諮問の4つのポイント」にあわせて「職員の目標となる資質」を策定するなどして、共通の目標を明確にすることは、運営基盤強化にもつながると思う。(岡田委員)</p>

「4つのポイント」にこだわらず、全体的なご意見として受け止めているもの	
<p>(意見)</p>	<p>文化観光拠点計画事業に入っているデジタル化や多言語を実施するだけでも、諮問の「4つのポイント」、特に「基本的機能の充実」「求められる役割」は達成できるように見える(小林委員)</p>
<p>(意見：展示)</p>	<p>学芸員の専門的な知識によって、展示手法・見せ方で集客につながる工夫はできると期待している。(小川副会長)</p>
<p>(意見：調査研究)</p>	<p>北海道遺産のような他の団体・取組と協働してネットワークをつくり、展示・研究に活かしてほしい。(矢野委員)</p>
<p>(意見：オンライン→オフラインの広がり)</p>	<p>ウェブサイトのアクセス数が(特に令和4・5年度は)多いことを活かして、ウェブと連携したイベントなどがあると、サイトを見て終わりにならず、来館にもつながると思う。(矢野委員)</p>
<p>(意見：アンケートの活用)</p>	<p>過去の企画展示の実績やアンケート結果から来館者の傾向をデータにしたうえで「この展示では若い人をターゲットにする」などの対応は狙える。来館者の多様性を踏まえながらも、ターゲットを絞った事業を実施することによって「求められる役割」が達成されたと言えるのではないか。(小林委員)</p>
<p>(意見：広報)</p>	<p>若い人はウェブサイトよりもInstagramなどのSNSをよく見るので、若い世代を対象とした場合は、SNSでの継続的かつ細かい情報発信が効果的だと思う。(岡田委員)</p>
<p>(意見)</p>	<p>博物館を本当に良くしようと思ったときの試み・事業として、ハード面は予算が必要だが、ソフト面はアイデアがあれば予算が不要な場合もあるので、外部予算に依らないアイデア・チャレンジを中・長期的に考えてもらいたい。(小林委員)</p>
<p>(質問：目標値の考え方)</p>	<p>入館者数を目標値としているが、「入館者数は多ければ多いほど良しとする」と理解していいのか。それとも「あまり多すぎても来館者にとってストレスになる」等の観点から、上限を設定しているのか〔目標値の根拠・考え方を検討し、示すべき、とのご指摘と受け止めている〕(小川副会長)</p>